

## 日本医学会分科会活動報告

学会名(No. 141 ) 日本食道学会

代表者名 竹内 裕也

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

### a. 特に学術的に重要と考えられるもの

本学会では、食道疾患を対象とし、外科、内科、放射線科、病理など複数科の医師により研究を進めております。対象疾患としては食道癌を中心としていますが、良性疾患である食道アカラシアや食道裂孔ヘルニア、最近増加傾向にある逆流性食道炎や食道機能異常なども含んでおります。単一の臓器の限られた疾患ですが、すべての科の叡智を集結して、治療し、病態を解明するという学会で、この分野では世界でも最高峰の学問的、臨床的レベルを誇っております。また専門医・認定医制度も確立しており、これまでに学会が認定した専門施設は食道癌治療成績が有意に良好であることを論文や学会ホームページで報告しております。2002年に「食道癌治療ガイドライン」を発刊し、その後は定期的に改訂を行い2022年に「食道癌診療ガイドライン第5版」を発刊致しました。学術集会や教育セミナーを通して会員に食道疾患診療の最新の情報を提供しております。また近年増加傾向にある食道胃接合部癌に対しては、日本胃癌学会と協力してガイドライン作成を行なっております。

### b. 当該領域における国際的な役割

わが国の食道癌治療成績は世界トップレベルであり、高度な知識と技術を必要とする食道癌診療の成績向上と国民への啓蒙に本学会が大きく貢献してきたと自負しております。また本学会の学術英文誌である Esophagus 誌は最新の Impact factor 2.4 と食道領域では Diseases of the Esophagus 誌とともに世界最高峰の雑誌と位置付けられております。2017年発刊の食道癌診療ガイドライン第4版および2022年発刊の食道癌診療ガイドライン第5版は英語版にして Esophagus 誌に掲載しており、世界中で引用されております。また1969年に食道癌取扱い規約を策定しその後は定期的に改訂し2022年に最新の食道癌取扱い規約第12版を策定致しました。食道癌取扱い規約は世界中で用いられており、食道癌取扱い規約第12版はガイドライン同様に英語版にして Esophagus 誌に掲載しております。

### c. 活動からもたらされる社会的な意義

高齢化社会の到来に伴い食道疾患患者は増加傾向にあり、今後ますます研究課題が増えることが予想されます。本学会は前身の食道疾患研究会が1976年より食道癌全国登録事業を開始し、これまでに食道癌取扱い規約、食道アカラシア取扱い規約、食道癌診療ガイドラインを作成してまいりました。その歴史と伝統からわが国における食道疾患に関する最も重要な学会と位置付けられています。今後さらに本学会が国民に果たす役割は増していくものと考えられます。最近では一般市民向けに市民公開講座や SNS での食道疾患の啓発活動を行なっております。

d.学会運営上留意している点

外科系の会員数と比較し内科系の会員数が少ないことが問題点として挙げられております。会員数3000人を目指し、内科系医師や若い世代の医師に魅力的な学会を目指しております。

II.日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載して下さい。

分科会の中でとくに関連が深い学会に日本消化器外科学会と日本胃癌学会があります。当学会が認定する食道外科専門医は外科専門医制度において、2階部分の消化器外科専門医の上に設定する3階部分の専門医として明確に位置付けられています。一方で、食道科認定医制度も設けており、全ての診療科の医師が一定の研修業績があれば取得することができます。また近年増加傾向の食道胃接合部癌に関しては、本学会および日本胃癌学会合同でのガイドライン作成が適切と考え、合同のガイドライン作成チームを結成し活動を行っております。